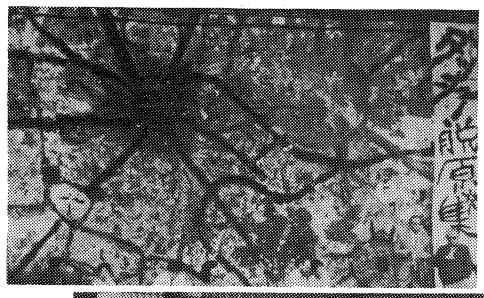
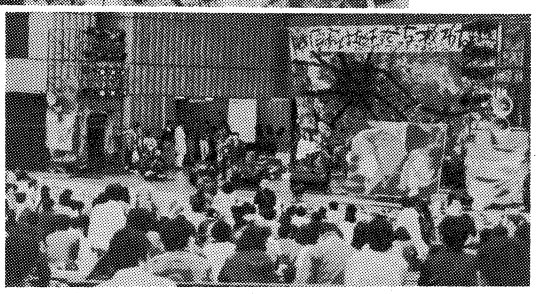
風をよむ

第11号100円
1990．5．10

編集　「風をよむ」編集委員会
発行　共産主義者同盟首都圏委員会





4・27～29脱原発をめざす東京行動うちぬく

90年代の脱原発・オルタナティブの前進にむかって

27日は清水谷公園で集会ののち、国会へ署名提出、請願行動。28日は日比谷公会堂で集会の後、東京駅まで銀座パレード。29日は日比谷野音でコンサート。脱原発をめざす東京行動は、全国から多くの人々の参加をえて、三日間の連続行動をおえた。以下、日付けを追ってレポートする。

4・27 三〇五万人の署名を積み上げ国会請願へ

平日、しかも昼間のとりくみなので、はたして結集のほどは……と不安ではあったが、少し遅れて会場に到着するとすでに七〇〇人ほど。さらに徐々に参加者が増え、デモ出発時には八〇〇人ほどになって安心する。北は幌延、泊など北海道、そして女川、福島の東北、中部、日本海側、中・四国、九州まで、色とりどりの横断幕が、それを持参して東京行動に結集した人々の気持ちをあらわすように、風にはためいて美しい。それから、今回の行動は、全国各地の市民団体、宗教者、生協の他、労組の参加がめだつ。首都圏のみならず大阪からも、動員をかちとって参加しているのだろうか。各労組の赤旗がめだった。

各地の報告、アピールを受けて、最後に全国ネットワーク事務局の小木曽さん（福井）から、①紹介議員の数がまだ少ない（79人）。もっと増やそう。②一〇〇〇万人署名を完遂しよう。③立法の内容、脱原発・エネルギー政策について大衆的論議をおこそう。というまとめの発言をうけ、衆・参それぞれの請願に出発した。

ダッシュ！脱原発集会＝東京ー4・28日比谷公会堂に二千人。賑やかに銀座パレードー

原発とめよう！東京行動九〇主催の「ダッシュ！脱原発集会」が、四月二八日日比谷公会堂で開かれた。子供からお年寄りまで、全国から幅広く二千人が集まり、会場を埋めた。特に女性の参加が圧倒的に多いのが印象に残った。

集会は、まず東京電力の模擬株主総会で幕を開け、チェルノブイリ寸前の重大事故を起こし、原子炉内に金属片を残したまま強引に運転が再開されようとしている福島第二原発三号炉の廃炉が訴えられた。六か所村からは、四月三日のウラン濃縮機器搬入と四月二六日のまやかしの「公開ヒアリング」強行への抗議行動と、村長選挙で亀裂が入った反対派の再結束がはかられつつあるという現地情勢の報告。原発分の電気料金の支払いを拒否したことから丸木美術館への送電を停止されている丸木俊さんのお話が続いた。

ソ連の作家で人民代議員でもあるアダモービチさんとキエフの医師でチェルノブイリ被害者の治療にもあたったというヤコブレフさんからは、ソ連でも反原発運動が起こりつつあり原発建設計画はほとんどつぶれていること、チェルノブイリ事故は未だに深刻な被害を及ぼしていても集会を持ったことが報告された。

脱原発法全国ネットワークからは、署名が三〇五万以上集まり、その内二五〇万が四月二七日の国会請願行動のなかで提出されたことが報告され、「引き続き一〇〇〇万を目指しながら、国会議員への要請を強めていこう」との提起がされた。

集会は「原発のお葬式」のパフォーマンスで幕を閉じ、参加者は歌あり踊りあり太鼓ありの華やかな銀座パレードへと繰り出した。

パレードの先頭に、日の丸をかかげたおじさんがいて、一瞬ギョッとした。冗談ではないらしい。若い人たちの強い抗議に、当人は顔を紅くしていたが、結局しまってくれた。運動はやっぱり、こうした矛盾をかかえつつ進むのだなあという印象を残した。

4・29 ノーニュークス ワンアース フェスティバル

地方からの参加者はほとんど帰ってしまったのか、参加者は五・六〇〇人とちょっとさびしい。折悪しく雨と強い風で寒々としたフンイキ。とはいえ若者中心のライブで、景山民夫さんのトークや、ランキン・タクシーのラップをはさんで、THE NEWS、生田萬弐&2020の終盤はそれなりにもりあがりました。絵をかいてくれた田島征三さん、人力発電などで力を出してくれた人たち、ごくろうさまでした。

これからの脱原発をめざす運動の方向は？

さてこの三日間の行動を終えて、今後どのように運動は進められるのだろうか？すでに報告してきたように、主催者サイドからはいくつかの提案がなされている。我々はこれをキチンと受けとめ、今後の地域・職場の運動の中で返していきたい。だが同時に、これまでの運動の延長上に今後の運動もとりくみうるのか？という率直な疑問もある。もちろん今まで以上に力を入れなければならないにしても……。例えば、今回の行動への参加者は、なぜ今まで以上に拡大しないのか？たしかに、労組の一定部分に反原発運動は定着し、そして今回の行動の基礎をこれが支えているといってもいいすぎではないように思う。これは成果だ。だが、これに比して市民運動、生協運動は、なぜこの運動に集中し切れていないのか？全国とはいわず、首都圏レベルですら、キチンと結集しきれていない現実がある。

運動のくみたての技術的な問題も多少はあるにせよ、問題は運動の基本的方向性にかかわる事柄のように思える。あるいは、余程のことがない限り、中央結集スタイルの政治はこの種の運動となじまないのか？ひきつづき地域、職場でのとりくみに力を入れつつ考えていきたい。

日本政府は朝鮮植民地支配の謝罪の立場を明らかにせよ！

五月二四日に予定されていた盧泰愚韓国大統領の訪日は、在日韓国人協定三世問題、さらに植民地支配の謝罪問題で韓国世論が硬化、一ヵ月前になっても公式発表にいたらず、延期もとりざたされるという異常な事態となったが、四月三十日の日韓外相会談で、一応の決着を見、予定通り五月二四日訪日の運びとなった。なおアメリカ、カナダ、メキシコ訪問は中止になったが、これはKBSや現代重工などの争議に代表される労働運動の予想以上の進展が政治危機一歩手前まで進行したことによると思われる。

三十日の外相会談での合意事項は在日韓国人協定三世について①永住権を認める　②指紋押捺制度を適用しない　③再入国の期間を現行二年から五年にする　④退去強制の事由を国交・外交上の利益を損なう場合のみとする　⑤外国人登録証の携帯義務については適切な解決策を見いだす　⑥教師への採用、参政権について継続協議とするの六点。①はすでに法務省の基本的な見解であり、②が最大の争点とされていた。一四年後までに「事実上の適用除外」とする日本政府と、「現段階での明記」を要求する韓国政府が対立したが、結局韓国政府が「おしきった」形となった。しかし日韓法的地位協定第二条に基づく正式協議ではなく、「政治決着」であることなど不明点が大きい。またこれから生まれる協定二世はもちろんのこと、協定永住者の中で指紋押捺を強要されるものとそうでないものが存在するという制度的矛盾が発生することになった。法務・警察当局は反発し、指紋に代わる制度の「開発」を急ぐという。またより根本的には、その前提である、朝鮮植民地支配の謝罪という基本的な立場を日本政府はいまだに明らかにしていない。

日韓民衆連帯の前提

盧泰愚来日に関連し、日本政府は「二一世紀を目指し地球的視野にたった未来志向的な協力関係の構築」をうたい、アジア・太平洋地域での経済協力、ウルグアイ・ラウンドへの対応、南北問題解決への努力などをかかげている。しかし具体的なプランも、またそれを裏打ちする、ポスト・ヤルタ体制への政治方針も欠如している。日本政府は今回の盧泰愚訪日、日韓首脳会談の最大の眼目を、盧泰愚からの天皇訪韓招請に置き、その下に「未来志向的な協力関係」をうたおうとしている。それは植民地支配の謝罪を曖昧にし、北を孤立化させ、さらに在韓米軍縮小をみすえ、日韓の集団安保体制の画策すら狙おうとするものである。これらのことごとくが、世界のトレンドに背を向けた時代錯誤的なものであることはいうまでもない。今、日本政府に求められていることは、なによりも植民地支配謝罪の立場の明確化と具体的保障であり、第二に、この前提の上で南北対話に向けたたらきかけ、第三に対日貿易の逆調問題の解決である。いわば政治・経済の両面にわたるもう一つの構造協議としての性格をもっている。

運動の側に即して言えば、従来の米日韓臨戦体制の強化ー廬泰愚来日阻止ー天皇訪韓阻止の街頭政治闘争というスタイルを脱却し、東アジアでの民衆の側から平和、民主、連帯のオルタナティブの創出にむけた運動が構想されなければならない。その第一は朝鮮植民地支配謝罪の国会決議要求の運動として開始された。また労働者連帯の運動も進んでいる。さらに東アジアに残る冷戦構造の解消にむけ非核ー軍備縮小の運動も必要となる。

日本政府の北敵視・軍拡路線を許すな！

これに関連して、南北の政府のこの間の動向にふれたい。特に顕著なことは、韓国とソ連の急速な接近、今年中にも国交樹立に向かい、他方、共和国とソ連の関係が冷え込み、北の孤立化と政策的破綻がすすんでいることだ。北の「二つの朝鮮」反対論、さらに国連同時加盟ークロス承認反対論は、当の北自身がWHOなどに韓国とともに加盟していることや、韓国と国交を結んでいる国と自らも国交樹立に動いていることから、すでに破綻しているし、国連同時加盟が即分断固定化につながるものではないことは東西ドイツを見れば明白である。朝鮮半島に二つの国家が存在していることは否定のしようのない事実であり、北の孤立化の進行の中で、南北の対話の促進に向けた国際的な環境づくりが急がれる。特に日本政府の北敵視政策や軍拡路線は、これに棹さすものであり、この転換、基本的には植民地支配謝罪の原則を明示し、そのもとでの友好関係の樹立や、東アジアの非核ー軍縮の観点から、日本の軍拡を阻止する民衆の運動が問われている。

大田世・西銘世どこがちがう？

ー5・24東京シンポジウムのよびかけー

来たる五月十五日で沖縄は、日本復帰後十八年をむかえます。沖縄では復帰二十年の節目に向かって、第三次沖縄振興開発計画の策定作業が始まる一方、最近の米ソ軍縮交渉の進展を反映した米軍の縮小計画の発表などもあり、沖縄の将来の枠組みを大きく変化させる事態が起こりつつあります。

こうしたおおきな変化の波のなかで、今年11月には知事選が予定され、革新系からは、元琉球大教授の大田昌秀さんが出馬を予定、現知事の西銘氏と争うことになりました。大田さんは、沖縄戦の研究と反戦平和の主張で多くの人々に支持されてきただけでなく、沖縄人のアイデンティティづくりと沖縄の自立をも主張してきました。大田さんが出馬するのは、こうした年来の主張を政治の場において実現することをめざしたからにほかならないと思われます。

その意味では、知事選は沖縄の新時代を大田世として切りひらくのか、それとも西銘世として従来の延長にとどまるのかの重大な岐路となるものだと言ってよいと思います。

私たちは、この間、様々なかたちで沖縄に係わってきた者ですが、この重大な岐路を沖縄の新時代として築く方向で選択することを願うものであります。そこで大田さんが東京に来られる機会に、大田さんと私たちの沖縄新時代への主張、提言をたたかわせ、新しい政策づくりの努力を行いたいと思います。そのことは、91年統一地方選をみすえての、本土における地域政治の政策づくりにもつながるものと思われます。

多くのみなさまのご参加をえて、以下の要領でシンポジウムを開催したいと思いますので、よろしくお願いします。

要　綱

一、**大田世・西銘世どこがちがう？5・24東京シンポジウム**

二、テーマ　**激動する世界と沖縄の新時代を考える**　ー十一月沖縄知事選を前にしてー

三、**日　時**　一九九〇年五月二日（木）
PM六時半～九時

四、**場　所**　総評会館（地下鉄千代田線新御茶の水駅下車）

五、**次　第**
①講演　沖縄の新時代へ
大田昌秀（前琉球大教授）
②パネルディスカッション
③まとめ

六、**会場費**　五〇〇円

七、**主　催**　5・24シンポジウム実行委員会
連絡先：沖縄自立連帯センター千代田区富士見二ー二ー二東京三和ビル三〇三／現代経済研究所内℡〇三（二六四）二七五三

世界は変る　安保をどうする

シンポジウム・六月十五日（金）午後六時～九時
全体会・神田パンセ大ホール（水道橋）
・六月十六日（土）午後一時～九時
分科会・豊島区民センター（池袋）

今こそ安保をなくそう！6月17集会・デモ
六月十七日（日）午後・上野水上音楽堂

5・23なくそう！成田治安法・東京集会
午後六時～・千駄ヶ谷区民会館（原宿）

三里塚の土地収用を許さない首都圏行動

スミダ資本への社会的包囲を強め

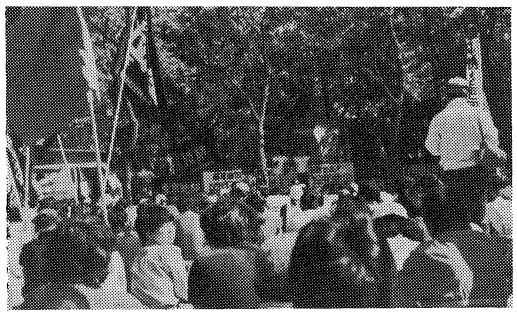
韓国スミダ労組の決死の闘争に全力で支援を！

四月三〇日、東京・葛飾区の金町公園で、韓国スミダ労組に連帯する会のよびかけによる「集団解雇撤回・生存権を返せ！交渉再開・本社の責任で解決を全国集会」が開かれ、労働者・市民八〇〇名が参加した。二一六時間のハンストを闘い抜いたスミダ労組の二名も、元気な顔を見せ、「交渉再開、謝罪と解雇通知の撤回、解決案の提示を求め、さらに闘う」と表明、また集会後スミダ本社への抗議行動が行われた。

昨年末、来日した三労組のうち、スワニー、タナシンの争議が一応の結着をみたのと対照的に、スミダ電気本社は二月二〇日以後全く交渉に応ぜず、争議は長期化している。これに対し、韓国スミダ労組代表団四名は、四月九日から本社前で交渉再開を求め座り込みを開始、一四日からはハンストに突入した。このハンストは一〇日間に及び、二三日これ以上の続行は生命の危険を招くとの医師団の判断で中止、二名が入院という事態に至ったが、三日後に復帰、現在も社前座り込み闘争が続けられている。

一〇日間に及ぶハンスト闘争は、争議の長期化の中で、膠着状態に陥りがちだった日本側支援運動に大きなインパクトを与え、スミダを包囲する新たな大きなうねりをつくりだした。地元の葛飾区長は異例の交渉再開を求める「要請文」をスミダ本社に提出、地域住民の署名も三〇〇人を越えた。東京都・亀戸労政事務所も団交を斡旋、さらに通産省、国会、また韓国大使館も同様の働きかけや意見表明を行った。スミダ本社社員も数名の役員を除き、管理職を含む全社員が「事態の早期解決を求める」旨の署名を行ったといわれている。

さらにスミダのメイン・バンクで二〇億円を越す融資をしている太神三井銀行への行動も強化された。四月一八日、二〇日太神三井本店への交渉が行われ、二三日になって三井が交渉を反古にするや、全都、全国二〇ヵ所で太神三井各店への抗議行動がなされ、二六日には韓国スミダ労組や支援六〇名余りがソウル支店への行動を展開した。この全国そして国境を越えた、背景銀行への抗議・包囲行動は、今後の進出企業問題を考えるにあたって大きな意味をもつものと言えよう。



こうした行動の盛り上がりを背景に、三〇日の全国集会は八〇〇名というかつてない多くの結集をかちとり、スミダ本社は抗議の声によって、十重二十重に包まれた。いまだに、韓国スミダが一〇〇%出資の子会社であるにもかかわらず、「関係ない」という態度を取り、社長の八幡一郎の「海外出張中」を理由に交渉に応じようとしないスミダ本社に大きな痛打となったことは確実である。「馬山輸出自由地域では、昨年の秋以来、日系企業の経営陣により『〇〇を要求するなら、うちも韓国スミダになるぞ』という文句が通用している」という。「韓国スミダになる』というのは『ある日突然』→『給料・退職金未払いで』→『解雇』→『経営陣の帰国』→『工場封鎖・撤退』…をさしている」（朝日ジャーナル4／20号）低賃金と無権利、人権無視の渡り鳥企業に対し、「韓国スミダになる」とその後どうなるかを徹底的に教えてやることこそ、日本の労働者の義務である。中小の渡り鳥企業から、松下・三菱にいたるまで日本の多国籍企業による海外進出に対し、日本の労働運動の対応はあまりにも遅れ、企業はやりたい放題というのが実状であった。こうした状況を転換する一歩こそスミダ労組支援の闘いである。

本紙は再生紙を使用しています。

国労労働者に聞く

労働者のすばらしさを信頼し、国労闘争をやりぬく

国鉄清算事業団闘争は、八七年JR発足以後三年を経て、ついに新しい局面に突入した。今回JRは、一〇四七人に対して、いわば二度めの解雇攻撃をかけてきた。国労ー国労闘争団をはじめとする労働者は、解雇白紙撤回をかかげて、新たな闘いへと踏みこんだこの闘いの渦中にある国労八王子支部の高尾さんに、忙しいところ無理をお願いして、お話をうかがった。

現在の情勢について

ー　さっそくですが、4月1日以後の闘いをめぐる情勢はいかがですか？

高尾　御承知のように、地労委においては三四都道府県・一〇九事件七二本、中労委一本、計七三本の連続勝利命令が出され、二二〇件の自治体決議があげられるなど、JRに対する社会的糾弾、包囲の闘いは進んでいます。また、昨年11月30日以来、現在にいたるまで四度におよぶストライキを打ち抜くなど、国労の団結と、組合員の闘う意欲は持続しています。

しかしその一方で、中労委ー第三者機関依存、あるいは社会党を介した「政治結着」をもくろむ動きも目立ってきました。社会党は、3月15日、土井委員長、田辺JR対策特別委員長連名で、国鉄清算事業団職員解雇対策本部長である海部首相に対して三項目の申し入れを行いました。その内容は①再度の本州JRへの広域採用、②退職希望者は3月31日、地元JRへ採用ー同日退職、③退職金の上積み、というものです。これは、この三年間の「地元JRへの採用」という切実な労働者の要求を踏みにじり、国労みずからが八九年六月臨時大会で決定し、今日に至るまで闘いの基本となってきた「全面解決要求」に泥をぬるものです。なんのために国労は大きな犠牲を払って今日までやってきたのですか。さらに、この動きの背景には、国労の企業別組合の連合体への移行、全労協からの引き上げ＝事実上の解体、北海道、東日本の将来的な連合加盟という思わくがあるといわれています。

闘いの展望について

ー　では、今後の解雇撤回に向けた闘いの展望はどうでしょうか？

高尾　分割・民営化攻撃のもとで、国労をとりまく条件も、また国労自身も大きな変化を余儀なくされました。この変化を、幹部から一組員にいたるまで、充分につかみ切っていないという面があるのではないでしょうか。闘いの意欲が、組合、労働者のおかれた現実とうまくかみあっていないという点はあるかもしれない。かつて、総評の中核部隊として二十数万人の組合員をかかえていた時代と、現在の総評ももはや消滅し、かつての主流派は鉄産総連を結成して去り、動労・鉄労によるJR総連が文字どうり資本の先兵となって敵対する中で三万余の国労が一身に闘いをになわざるをえないという事態との大きな落差をなかなかのみこめていない。清算事業団の三年間は、ある意味では、今日この事態のあることを見すえ、これに向けて闘いの構えをつくり切るための三年間でもあったわけですが、いわば「過去の栄光」からまだまだぬけきっていないところはあると思います。

しかし悲観してはいません。その意味でも、闘いは新たな局面に入ったわけですし、この解雇撤回闘争の意義は、弁護団も指摘しているように、差別と人権侵害との正面からの闘いであり、労組の立場をこえて全ての差別に苦しむ労働者の共感を得る可能性をもった闘いであり、同時に差別する側に立つ人々を撃つ糾弾の内容を持つ闘いだと思います。

ー　今後の具体的な闘争方針については、現時点では、3月9日の国労一五六拡大中央委方針「当面する闘いについて」を拝見したのですが、率直にいって、これもまた具体的な面で、とくに運動方針という点でわかりづらいのですが、どのような闘いが必要なのでしょうか？

高尾　その方針が出された時点では、「4月1日以降の態勢確立」というところに力点がおかれたことは否めないと思います。

従って、これとはちょっと離れて述べたいのですが、先程いったとうり、反差別、人権を守るという観点は重要です。ここから今日の「企業共同体」の下で苦しんでいるたくさんの働く仲間と手を結ぶ闘いを展望しなければならない。それだけではなく、差別と闘う広汎な人々と団結をめざすことができる。被差別部落大衆や、在日韓国人朝鮮人、アジアの外国人労働者、沖縄人、アイヌ民族、女性、「障害者」などと積極的に団結をめざしたい。

こうした方向を基本として、①闘争団の団結、②職場反合闘争を車の両輪として進めることが必要です。①についてですが4月1日以降、それまでの清算事業団の支所の多くが閉められ、労働者の団結のよりどころが奪われている。「生活対策」とともに、闘争団に結集する仲間がその団結を確認しあえるような態勢づくりが、ぜひとも必要です。生活のためにアルバイトをするのは仕方がないですが、バラバラにするのではなく、できれば毎日顔をそろえることができるような配慮が必要だと思います。

②については、いわゆる本来業務の職場における反合闘争を解雇撤回闘争と結びつけてキチンとやりきることです。今日までのJR職場における合理化、労働条件の劣悪化は、すさまじいものです。頻発する列車事故が、その証拠です。かつて国労は「労働運動の源泉は職場闘争である」、「職場に労働運動を！」という信念をもって、各事業所における三六協定締結権や職場団交権を内容とする「現場協議制度」を勝ちとり、これを活用して「職場における権利意識の確立」、「業務量に見合う要員の確保」、「職場環境の改善」等の成果をかちとってきた。またこうした闘いを背景として反合闘争のあり方をめぐる様々な論争を組織してきた。これを忘れてはならないと思います。現在、職場での力関係は大きく変わり、国労は少数派です。だがこの変化した条件のもとでの新たな反合闘争がめざされなければなりません。職場レベルでの不満や、要求は非常に大きいと感じています。これを反合闘争の再構築へと結びつけることです。

もうひとつ、あたりまえのことですが、第三者機関にたよったり、「政治結着」に幻想をもったりせずに、労働者自身の実力闘争で展望をひらくこと、これが基本ではないでしょうか。

闘いが団結を強める

ー　その職場の現在の雰囲気はどうですか？

高尾　2月26～28日の第三波ストは、前にいったような政治的な動きがあって結局延期になったのですが、こういうことがあると組合員は、かえって動揺します。私の知る限りでも脱退者が出ました。逆にそのあとのストを打ち抜くことによって復帰する人もいたという具合いです。職場段階では、労働条件の問題を含めて不満がたまっていますから、打ち抜いてスッキリしたという感じです。

国労運動の総括と、自立の基礎

ー　いろいろお話をうかがっていると、やはり修善寺大会以後の問題というのは大きいなあと、大づかみな感想をもつのですが、たとえばいわゆる協・共連合（協会派と共産党＝革同）の指導のあり方の問題というのは感じますか？

高尾　それはありますよね。情勢も違いましたが、民同派というのは、それなりに、職場闘争、大衆運動というものをよくやります。これに較べると、現在は、官僚的機関運営というか、幹部請負主義というか、とにかく、管理的、統制的な発想が強い。協会派、共産党に共通していることですが、大衆闘争の利害よりも自分たちのセクトの利害を優先する傾向があると思います。これが結果としては、労働者の組合に対する期待を裏切ることになります。

ー　全労協への国労の参加というのも、修善寺大会なしにはありえませんよね。

高尾　そうですよね。なんというか、やっぱり国労の幹部は人がいいのでしょうか。逆に国労なしには全労協もありえないという現状ですから。そこでですが、岩井さん流にいえば「無党派左派」の存在が問われるわけです。私は常々、協共連合の尻押しにとどまってはならないと考えています。国労の運動の戦略的方向性というものを独立左派の立場から提起しなければならないと。分割・民営化攻撃のねらいにしても、また、今日の労戦の中での階級的労働運動の再構築に向けた国労運動の役割にしても、本部方針の消化におわれるのではなく、もっとしたたかな組合運動へのかかわりをつうじて、日本帝国主義と本当に対決する労働運動の戦略的方向性を貫徹すべきではないですか。

ー　最後になりましたが、これも本格的には修善寺大会以後の激しい組織攻防をくぐり抜ける中で今後の国労運動の発展の芽はどこにあったでしょうか？

高尾　現在にいたるまで、毎日が人生の縮図を見せられるようでした。本当に涙もあり、笑いもあり。でも、いまでは死語かもしれないけど、そういうひとりひとりのドラマの中でのこすっからくて・ドジカルな労働者のすばらしさ、これは信じていいと思います。

ー　どうも長時間ありがとうございました。

（4月25日・文責編集部）

天皇制賛美はゴメンだ！「即位の礼・大嘗祭」に反対する共同行動

4・29結成集会に一〇〇〇名参加！

4月29日、豊島公会堂において天皇制賛美はゴメンだ！「即位の礼・大嘗祭」に反対する共同行動（略称・ゴメンだ！共同行動）の結成集会が、一〇〇〇名もの結集をもって成功裡に克ち取られた。

当日、豊島公会堂の公園には、一〇〇人を越える私服がうろつき、反天皇制の行動に対する権力の弾圧のすごさ、一目瞭然である。

集会は、司会者のあいさつのあと、天野さんの基調報告で始まった。基調は、「日の丸・君が代」の強制等にみられるように、象徴天皇制国家の国民たる意識を育成しようとする国家権力や右翼のテロに対し、天皇制タブーを許さず、「即位の礼・大嘗祭」反対の闘いをつくっていこう。また、盧・アキヒト会談、礼宮結婚フィーバーと闘っていこうとの力強い発言で「共同行動」のスタートを宣言した。

続く沖浦氏の講演は、①日本民族における天皇制の役割②大嘗祭のおいたちの二点について、わかり易く、かつ力強い話であった。

そして、最後に反天皇制運動を広げていくためには、アジテーションだけではなく、歴史の真実を学習し、平易に語っていくことが大切であると、と述べた。

柏木博氏（造形大教員）の講演は、写真でみる天皇のイメージ変遷であった。明治ー昭和ー平成へ移行する中で、アキヒトの「マイホーム」的で親しみ易いソフトムード作りが写真からもはっきり見てとれる。

連帯あいさつでは、地域の反天皇制の闘いや指紋押捺拒否の闘い等、一〇団体以上から今後も反天皇制の闘いを力強く担っていきたいとのアピールがあった。こうした状況を転換する一歩こそスミダ労組支援の闘いである。

「太平洋に壁はいらない in ヨコスカ」集会

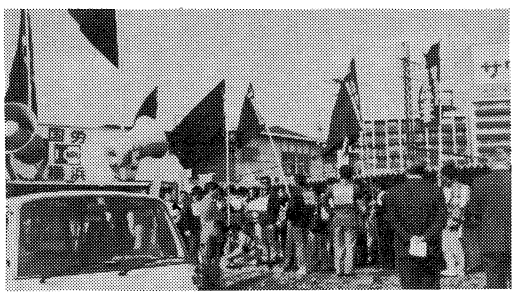
90年海の軍備撤廃国際行動週間の「太平洋に壁はいらない in ヨコスカ」集会が4月22日教育会館に満員の一五〇人が参加して開かれた。

集会は藤井治夫氏（軍事評論家）の「米ソ新時代に自衛隊はどこへ行く」と題する講演がおこなわれた。次いで梅林宏道氏から14ヵ国（ニュージーランド、スウェーデン、ノルウェー、アメリカetc）44行動以上の国際週間の報告がなされた。（日本では岩国、佐世保etc）又横田、厚木、逗子での反基地の活動が報告され、グリーンピースジャパンからはサンフランシスコからベガ号が、増強を続ける在日米海軍に抗議するために出港し、六月下旬、七月に横須賀に到着、広島・長崎そしてソ連方面に活動することが発表された。

集会後、途中から豪雨にかわるという天候の中、企画したパフォーマンスが十分には出来なかったが、空母インデイペンデンスの母港化反対、トマホーク配備反対を訴え、ピースマーチ（デモ）が元気に行われた。

労戦再編の中のメーデー

日比谷に二万人結集！

今年の第六一回メーデーは、国際メーデー百周年にもあたっていたが、昨年の「連合」、「全労連」、「全労協」の分立という、ナショナルセンターの再編成のもとで、わが国メーデー史上、初めての全国的分裂集会となった。

東京では、連合が代々木公園、全労連が夢の島公園、そして都労連、東京地評等のよびかけによる日比谷野音などで行われた。野音の集会は、地評での共産党系との綱ひきでなかなか決まらなかったが、結果としては、昨年同様のパターンとなった。